

【翻 訳】

The Oral Method of Teaching Languages

By Harold E. Palmer (V)

杉 田 由 仁

オーラル・メソッド (Oral Method) は、1922年に文部省顧問として招聘され、以後14年間、当時の日本の英語教育刷新に尽力したパーマー (H. E. Palmer, 1877-1949) が、組織的な指導原理に基づいて開発した外国語教授法である。本書はパーマーが来日する以前に英国で刊行され、日本では1924年に英語教授研究所によって発表された。オーラル・メソッドとはどのような教授法であるかについて詳述されており、パーマー外国語教授法の原点を探るには格好の書である。本稿では、オーラル・メソッドによる授業において「話すこと」の指導に有用な口頭練習としてパーマーが体系的に分類・整理した受容的・産出的活動の内、再生活動と定型会話の構成単位を、用語のアップ・デート等を行い、訳出を試みることにした。

受容的・産出的活動 (生徒が発言することを求められる活動)

この練習はおおまかに下記の3つの活動に分類するのがよいかもしれない。

- a. 再生活動 (Reproduction)
- b. 定型会話 (Conventional Conversation)
- c. 通常会話 (Normal Conversation)

aの活動は、生徒が教師の言ったことを真似して繰り返す練習である。

bの活動は、通常の会話とは異なり、いくつかの約束 (convention) に基づき、教師による質問に対して生徒が応答することにより、文構造や文法項目に習熟するための練習である。

[指導例]

[pa:], [ba:], [ta:], etc. ; [ra:] [tra:], [pra:] [a:p], [a:b] [a:t], [a:tn], etc.

口頭練習の形式 13 (音素の再生)

生徒はあらかじめ含まれる音素に基づいて段階別に分けられたリスト⁽¹⁾に掲載されている単語を、教師の発音を真似て再生する。

[指導例]

[i:] be, been, see, key, tea, eat, meat, week, green, etc.

[i] give, live, bit, hill, sit, till, six, etc.

[ɔ:] larger, smaller, better, honour, doctor, etc.

口頭練習の形式 14 (音調の再生)

教師は音調の特徴に基づいて分類されたリスト⁽²⁾の語や文を発音し、生徒は聞いた通りに真似して発音する。

英語における主要な3つの音調とは、

(a) 事実を伝える表現(平叙文)は下げ調子(falling tones)となる。

[例] Here! (↘) There! (↘) Mine! (↘) One! (↘) Two! (↘)
Yes! (↘) No! (↘)

(b) 疑念を伝える表現(疑問文)は上げ調子(rising tones)となる。

[例] Here? (↗) There? (↗) Mine? (↗) One? (↗) Two? (↗)
etc.

(c) 訂正や丁寧に否定する表現は、上げ→下げ→上げ調子となる。

[例] Here! (↗↘) There! (↗↘) Mine! (↗↘) None! (↗↘) etc.

本書の目的の1つは、オーラル・メソッドの授業で活用可能なすべての練習形式を、論理的な順序で練習の実例とあわせて提示することにある。もしも生

徒が会話の中で間違いを犯し、英語らしくない表現や言い回しで話した場合には、その発言を訂正させる必要がある。その間違いが次々に現れるようであれば、間違いが少なくなるように直させる必要がある。間違いではなく、問題となる誤りのレベルである場合には、時間をかけて計画的に矯正するようにしなければならない。そのため、教師は折を見て、計画的に矯正するための時間を授業中に設定する必要がある。

“see” に含まれる [i:] という長母音をどうしても短く発音してしまう生徒がいたら、この長母音の発音に注意を向けさせて、[i:] を含む語を 20 語程度繰り返して発音する練習に取り組ませる。接尾辞 -tion を [ʃə:n] や [ʃɛn] のように発音する生徒には、英国人は [ʃn] と発音することを説明し、-tion 含む語の例を 20 語程度与え、繰り返して発音する練習に取り組ませる。“When?” “Where?” “Why?” “When did you go?” “Why did he come?” のような疑問文を上げ調子で発音してしまう生徒には、60 分間の授業中に数分間、下げ調子のイントネーションを練習する機会を与えるようにする。

正確さの原理 (principles of accuracy) に従うと、生徒が不正確な発音を身につけてしまうような機会を与えないようにすることが重要で、そのため会話の授業において、ここで検討しているような「再生練習」によって不正確な発音を身につけないようにしたり、矯正する機会を設けることはどうしても必要となる。

口頭練習の形式 15 (初歩的な文の再生)

練習形式 4 から 8 を説明した際に、いくつかの文は意識的な口頭同化を促進するのに適していると述べた。これらの文は言語学習の初心者にとってまず最初に学習すべき語、すなわち学習が進むにつれてさまざまな言語材料における中核となる重要語句で構成されていることに気づく。このような語句を含んだ文を何回も十分に聞き、教師が再生させてもよいと判断した時には、“Now

repeat these sentences after me, imitating me as closely as possible.” と言って、繰り返させるようにする。

[指導例] (口頭練習の形式4を参照のこと)

This is a book.—pen.—pencil.—knife.—key.—letter.—stamp. etc.

口頭練習の形式16 (対話文の再生)

このような練習形式は特に、初級コースや矯正コースにおける練習に適している。上級コースの生徒に対しては、練習形式を多少変えた方がよいであろう。すでに対話形式をある程度身につけた生徒たちは、新しい対話表現を学ぶことを目的とするであろう。授業準備に余念がない教師であれば、日頃から新しい表現を集めておいて、いつでも教える準備ができています。

[指導例]

I hope I'm not troubling you (too much).

Now there's something special I want to ask you.

I quite agree with you.

Are you sure you can spare it?

I hardly know what to answer.

There's no doubt about it.

You mustn't pay attention to things of that sort.

That's just the bother. Etc., etc.

今や上記のような有用な対話表現を100~1000は収集できているように思われるので、生徒たちにとってなじみのない表現が相当数あると考えられる。それらを指導する最適な方法は、教師の後について繰り返して言わせるということである。つまり、新しい表現形式を指導するということは「再生」という活動から始めるということに他ならない。しかしそれは、新しい表現形式を一覧

にして再生して覚えるという練習ではなく、それぞれの表現形式を対話文の中で提示して練習させるという指導方法が望ましい。生徒に与えられた文の意味を理解させるのではなく、その文を訳したり、平易な言葉で文を言い換えたりして適切な説明を行って、理解させるようにする。

口頭練習の形式 17 (文章の再生)

詩の学習や演劇のせりふ、演説の準備として行うように、ひとまとまりの文章を暗記することは、時として必要になることがある。意識的な口頭同化を再生活動の原理と結合して練習する必要がある場合には、外国語を学ぶ生徒たちに文章全体を暗記させることが有効な練習となることがある。

「定型会話」における1つのステージとして行う再生

次節で説明を行う「定型会話」という練習形式において、ある生徒については「定型化された (conventionalized)」質問に答えさせる前に、その事前指導としてドリル練習が行われなければならないことに気づく。また、かなり上級のレベルにある生徒に “What’s the name of the thing we use when we write?” というような長い質問文を与えた場合には、いくつかの点で不十分な回答が返ってくるのが考えられる。そのため、その生徒には質問に答えさせる前に、質問文を教師の後に読ませてから、実際に質問するようにする。“we call him a ...” “when I want to know ...” “when I don’t want somebody to ...” などの語群を、生徒がひとつながりの表現として習得できるまで何度も繰り返して練習させるのである。

定型会話 (Conventional Conversation)

定型会話は、生徒が黙っていないで発言することを求められる練習の内、2番目に分類される練習形式である。用語としての定義は「ある特定の結果につ

なげるための系統的な計画に沿って編成された教師・生徒間の会話形式」となる。つまり、定型会話とは「通常会話」（日常生活における会話）ではなく、特定の目的を達成する練習のために考案された対話形式の教材に他ならない。

「通常会話」による練習は、すでにかかなりの言語運用能力を身につけていて、英語の間違いがほとんどないレベルの生徒にのみ、適した練習方法である。したがって、オーラル・メソッドによる授業が必要な生徒たちには「定型会話」による練習が必要となる。周到に計画された定型会話による授業を行うことにより、理解するのが難しい「ピジン英語」の矯正や言語使用における悪癖の根治、そして新しい習慣の形成を行うことが可能となる。定型会話による練習は、望ましい言語習慣を形成する機会を十分に与え、本物の言語運用能力につながる言語使用の技能を身につけさせ、その後の言語能力の伸長を促す。

定型会話は、教師がその練習方法に習熟して会話で使用する教材をしっかりと準備できていれば、容易に練習を行わせて生徒の興味・関心を高めることができる。逆に、練習方法に習熟しておらず教材も十分に準備できていないと、どのように練習を始めたらいいかかわらず、途方に暮れてしまう。とりとめのないいくつかの質問と口ごもった応答が行われ、その後の授業はピジン英語のオンパレードと退屈さが待っていることになる。

定型会話は発話を連続させる構成単位 (unit または item) によって編成される。各構成単位は通常、教師による発話とそれに対する生徒の適切な応答という編成になるそれぞれの構成単位が間をおかずに順序良く続くと、授業は活気に満ちて面白く、質的にも量的にも価値ある授業内容となる。逆に、構成単位につながりがなくて中断したり、教師が発話の流れを止めたり自分の言いたいことがわからなくなったり、あるいは授業内容の段階づけ (grading または gradation) が不適切で生徒からの応答が遅かったり止まってしまうと、その結果として授業は退屈であまり価値のないものになってしまう。教師は常に構成単位を連続して提示する準備ができていて、さらにその内容を2方向に段階

づける備えもできていなければならない。生徒の応答がためらいがちで途切れ途切れになってしまう場合には、そのやり取りを易しく、つまりレベルを下げるのが1つの方向性である。これに対して、構成単位によるやり取りが簡単すぎて生徒の興味・関心が散漫になってしまう場合には、やり取りの内容を難しく、つまりレベルを上げるのがもう1つの方向性である。また、言語運用能力が異なる生徒たちで構成されるクラスでは、上級レベルの生徒たちに対しては構成単位を難しく、中級以下の生徒たちに対しては構成単位のレベルを下げるができるように準備しておかなければならない。

このような構成単位の操作を疲れすぎることなくうまく行うためには、教師はどうしても定型会話による指導技術というものに習熟しなければならない。具体的にはまず、自分が取り扱うすべての定型会話教材を完全に把握して、異なるすべての構成単位がすぐにわかり、労せず取り出せるようにしておくこと。そして、提示する価値のある場面において絶好のタイミングで、1つのあるいは複数の構成単位を導入できるようにするということである。教師が構成単位の分類を研究すればするほど、定型会話を用いて授業を行うことに熱心になるであろう。さらに定型会話による指導技術に習熟した教師の多くは、無味乾燥と思われるような授業内容には関心を示さなくなるのである。

これ以降のページで、多くのさまざまな「定型会話」の練習形式について検討を行う。我々が取り扱うことのできるほとんどすべての種類の口頭練習を紹介していくつもりである。我々の学習プログラムのすべてにおける定型会話の1つ1つの発話を確認していくことにより、その興味深い特徴に気づき、実際の授業で活用する瞬間を心待ちにすることになるであろう。

定型会話を構成する構成単位は下記の通り、5つの方式に分類するのがよいかもしれない。

- (1) 構成単位の方式は、
 - a. 質問と応答

- b. 命令と応答
 - c. 陳述（意見・考え）の完成
- (2) 質問の方式は,
- a. 一般疑問文
 - b. 選択疑問文
 - c. 特殊疑問文
- (3) 質問の方式は,
- a. 短い質問文
 - b. 長い質問文
- (4) 応答の方式は,
- a. 簡略な答え方
 - b. 短い答え方
 - c. 長い答え方（あるいは模倣・繰り返し）
- (5) 構成単位は,
- a. ドリル形式による配列
 - b. 変化に富む配列

この分類に沿って、具体例を見ていくことにする。

- (1) a. 質問と応答

What's that? It's the table.

What's a horse? It's an animal.

Is snow white? Yes, it is.

- (1) b. 命令と応答

Ask me for my book. Let me have your book, please.

Tell me to stand up. Stand up.

- (1) c. 陳述（意見・考え）の完成

Iron is heavier than wood, therefore wood …

Therefore, wood is lighter than iron.

I wrote the letter, therefore the letter …

Therefore, the letter was written by you.

This chair's made of … of … of …

It's made of wood.

- (2) a. 一般疑問文（肯定または否定の応答のみを必要とする疑問文）

Is this a table? Yes, it is, or No, it isn't.

Is a horse an animal? Yes, it is.

Am I speaking English? Yes, you are.

Do you use a pen when you write? Yes, I do.

- (2) b. 選択疑問文（疑問文の一部を応答として繰り返すことになる疑問文）

Is this a table or a chair? It's a table, or It's a chair.

Is a horse an animal or a metal? It's an animal.

Am I speaking English or French? You're speaking English.

Do you use a pen or a knife when you write? I use a pen.

- (2) c. 特殊疑問文（疑問詞で始まり、質問に含まれない語句で応答する疑問文）

What's this? It's a table.

What's a horse? It's an animal.

What am I speaking? You're speaking English.

What do you use when you write? I use a pen.

上記 a～c は、疑問文の 3 つの困難度を例示するものである。生徒が特殊疑問文への応答を躊躇するようであれば、教師は通常の疑問文や選択疑問文に置き換えて改めて質問するようにする。

- (3) a. 短い質問文（質問にとって不可欠な疑問文のみで構成される）

What's this?

What do we use when we write?

Is it pleasant or unpleasant to lose a train?

What can I do if I have a pen?

What must you have when you write?

- (3) b. 長い質問文（生徒が長い文を理解して応答したり，無意識の同化を伸ばす機会を与えるために，不可欠な疑問文に語句を付加して構成される）

Now I should like you to tell me what this is. (間接疑問文)

What's the name of the thing we're in the habit of using whenever we write a letter or a postcard?

Is it generally considered to be a pleasant or an unpleasant thing to get to the station after the train has gone?

What is it necessary for anyone to have if he wants to write a letter or postcard?

- (4) a. 簡略な答え方

Is this a table? Yes, or No.

What's a horse? An animal.

What's the capital of England? London.

What do you use when you write? A pen.

What do you call a person who teaches? A teacher.

Is it right or wrong to say that London's the capital of France?

It's wrong.

- (4) b. 短い答え方

Is this a table? Yes, it is, or No, it isn't.

What's a horse? It's an animal.

What's the capital of England? London is.

What do you use when you write? I use a pen.

What do you call a person who teaches? We call him a teacher.

Is it right or wrong to say that London's the capital of France?

It's wrong to say that.

(4) c. 長い答え方 (あるいは模倣・繰り返し)

Is this a table?

Yes, it's a table, or

No, it isn't a table; it's a chair.

What's a horse?

A horse is an animal.

What's the capital of England?

London is the capital of England.

What do you use when you write?

When I write, I use a pen.

What do you call a person who teaches?

We call a person who teaches—a teacher.

Is it right or wrong to say that London's the capital of France?

It's wrong to say that London's the capital of France.

上記 a~c の内、b の短い答え方が実際の会話では望ましいと思われる。a の簡略な答え方は初心者への指導に役立つ、生徒の発言を伴わない活動から発言を伴う活動への橋渡しとして活用することができる。c の長い答え方については、口頭による模倣や流暢さの習慣を形成するのに役立つ。

(5) 定型会話のための構成単位の配列については、より詳細な分類が必要となる。次節で「練習の形式」に分けて、例示を行うことにする。

注

- (1) 1917年に初版が刊行された *A First Course of English Phonetics* の Part III で、英語音の練習リスト (80項目) を発音記号とスペルに分けて提示している。
- (2) 1924年に初版が刊行された *A Grammar of Spoken on a Strictly Phonetic Basis* の Part I, セクション 20~39 で Intonation の原則について解説し、Part III でリストを提示している。